



越生町と梅の歴史

「梅の里」越生と梅の関わりは、南北朝時代（1350年頃）に九州太宰府から天満宮を分祀した際に、菅原道真にちなんで梅を植えたことに始まると伝えられています。

江戸時代には、梅は特産化しており、江戸に生梅や梅を出荷していた記録があります。

明治になると観光地としても注目されるようになり、越辺川岸の一画が園地化され、明治33年（1900）には梅林保勝会が結成されました。多くの文人墨客を魅了するところとなり、明治34年に来遊した歌人で国文学者の佐佐木信綱は「入間川高麗川こえて都より来しかひありき梅園のさと」の歌を詠んでいます。



田山花袋や野口雨情も訪れ、作品をのこしています。

昭和15年（1940）には、県の名勝に指定されました。

「関東三大梅林」の一つである越生梅林には、樹齢670年を超える「魁雪」や「越生野梅」などの保存古木をはじめ、約1千本の梅が植えられています。開花時期には、町内全域で約2万本もの梅の花が美しく咲き誇ります。



梅園神社（旧小杉天満宮）

越生の梅のはじまりに関わる神社。明治40年（1907）に近隣の神社を合祀し、現在の社号となりました。

越生のオンリーワン「べに梅」

梅生産者／山口農園代表 山口由美さん



日本でここにしかない「越生べに梅」を全国へ

越生町には「べに梅」という在来種があります。べに梅は古くからある品種ですが、保存期間の短さや加工の難しさから、市場に出回ることがほぼないため、一般に名が知られることのない稀少な梅でした。町内でひそかに育まれてきた「べに梅」ですが、近年、6次産業化のための取り組みの一つとして、その在来種としての価値が見直され、ブランド化の動きがはじま

りました。  
成分分析によると、一般に普及している南高梅などの品種よりクエン酸値が高く、ペクチンが強い「固まりやすい」という特徴が出たため、それを活かしてデザートや和菓子など加工食品の商品化を進めています。青果としては、都内の百貨店で取り扱うようになり、販路も広がっています。生産量の少ない稀少な「べに梅」は、一般品種に比べ高級品として販売されますが、購入していただいた方からは、「薄皮でジューシーで、フルーティーな香り」と好評で、リピーターも増えてい

ます。  
今後も企業とコラボレートするなど、多くの人に知ってもらえる機会を増やしていきます。べに梅のオンリーワンの価値が広まっていくことで、「越生の梅」に関わる、産業全体のブランド化に繋がっていきたいと考えています。また、農業における次世代の担い手に、誇りやプライドを感じてもらえるよう特産品を守っていくことが使命だと思っています。



「越生べに梅」とは・・・

- ・越生町に古くから受け継がれ栽培されてきた固有の梅
- ・果実は、香り高く薄皮で果肉が厚い
- ・完熟するとフルーティーな香りで、表面に紅色がさすことから「べに梅」と呼ばれる



越生べに梅の魅力を発信する山口農園の山口さん



城西大学とのコラボレートにより新しく生まれた「JOSAIコーラーゲンようかん べに梅味」